



ACADEMIC GROOVE

2020

Coronavirus

the

Beyond

アカデミックグルーヴ 2020 : コロナを超えて

コロナを超えて

新型コロナウイルスの影響によって、キャンパスへの通学を断念させられている君たちに、「ACADEMIC GROOVE2020」を贈ります。

「アカデミックグルーヴ」って知っていますか？

それは、学術(学問)の現場に漂うグルーヴ(わくわく感)のこと。

私たちは書籍やフリーペーパーなどによってこのグルーヴ(わくわく感)を社会に伝える活動、「ACADEMIC GROOVE運動」を続けています。

人間は未知への探究を欲する動物です。

古くから、自然、社会、人間に対する尽きせぬ興味を持ち続け、知識を蓄積し、不思議を解き明かしてきました。

強いグルーヴ(わくわく感)を原動力として、「学術」という高度に知的な体系を作り上げてきたのです。

いわば、学術の巨木。

この巨木は現在も世界中の人々の探究心によって成長し続けています。

私たちは「学術に対してグルーヴを感じ、それを追求していくことは人間の本性である。

だから、アカデミックグルーヴの追求は人権と同様、人間の基本的な権利である」と考えています。

コロナ禍の現在、そして、今後、コロナと共存していく時代においても、

この権利は不動の権利であり、人類は永遠にアカデミックグルーヴを感じ続けていくことでしょう。

だからこそ今、キャンパスに行けない君たちには自らの想像力によってわくわくしてほしいと思っているのです。

私たちが言いたいこと、それはたったひとつのこと。

体感せよ、知のグルーヴを！

一般社団法人アカデミックグルーヴ
清水 修 石川 淳

ACADEMIC GROOVE is

2008年、ACADEMIC GROOVEを社会に伝えるために、書籍『東京大学ACADEMIC GROOVE』が発刊されました。以降、研究者、大学職員、学生が協働して編集制作物を作り、社会にACADEMIC GROOVEを伝えていく活動、「ACADEMIC GROOVE運動」が始まりました。

具体的な活動としては、書籍に引き続いて、2010年には4種類のフリーペーパー『mini ACADEMIC GROOVE (SYNAPSE、

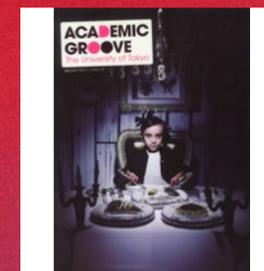
CHOICE、Academic Park、LIFE)』が発刊。2012年にはフリーペーパー『mini ACADEMIC GROOVE_Sign』が発刊されました。その後、2018年にACADEMIC GROOVE運動を推進していくための枠組みとして、一般社団法人アカデミックグルーヴが設立されました。さらに、2019年には東大以外の大学による初めてのACADEMIC GROOVE、『京都大学ACADEMIC GROOVE_SIGNAL』が発刊されました。

ACADEMIC GROOVEとは？

「学問の場に漂う『わくわくするほどの面白さ』、『ドキドキするほど楽しい雰囲気』」を指し示す造語です。この言葉は、2006年、清水・石川の考案により、誕生しました。



ACADEMIC GROOVE LINE UP



書籍

東京大学アカデミックグルーヴ

ACADEMIC GROOVE

The University of Tokyo

2008年 / 1,200円

東京大学制作、東京大学出版会販売



FREE PAPER

mini ACADEMIC GROOVE

『LIFE』

2010年

東京大学制作



FREE PAPER

mini ACADEMIC GROOVE

『SYNAPSE』

2010年

東京大学制作



FREE PAPER

mini ACADEMIC GROOVE

『Academic Park』

2010年

東京大学制作



FREE PAPER

mini ACADEMIC GROOVE

『CHOICE』

2010年

東京大学制作

PDF公開中▶

<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400005057.pdf>



FREE PAPER

mini ACADEMIC GROOVE

『Sign』

2012年

ACADEMIC GROOVE運動有志制作



FREE PAPER

京都大学ACADEMIC GROOVE

『SIGNAL』

2019年 / 京都大学学術研究支援室&一般社団法人アカデミックグルーヴ制作

PDF公開中▶ https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/assets/AcademicGroove1-Signal_withURLquestionnaire.pdf

濱田純一

習慣の枠を超えて

この年度始めは新型コロナ流行のあおりを受けて、皆さんも勉学の出鼻をくじかれたことと思います。受験勉強とはまた異なり、大学での勉強は、人と議論していくことによって思考や知識を深めていくという面が多分にあるので、残念です。しかし、皆さんのことですから、この何か月かを逆に、「自分の頭で考えて行動する」という確実な経験をする良い機会とすることが出来た人も多いと思います。

私たちは日ごろ主体的に考えて行動しているようでも、これまでの日々の生活習慣や思考習慣の枠組みの中で生きています。学ぶときに用いる言葉、概念、論理も少なからず、そうした習慣に囚われています。それはたしかにストレスも少なく合理的なのです。また確実に一定の成果は出てきますので、安心感もあります。

しかし、大学という場で期待されているのは、皆さんがそうした習慣の枠を超えて新しい思考の枠組みを生み出していくことです。「課題解決」という言葉が世の中に流行していますが、皆さんには、この言葉だけに囚われてほしくはありません。むしろ、「課題を発見する」ということも、大学の大きな役割です。

そのために必要なのが、習慣の枠から意識的に飛び出してみるということです。人間であれ、社会であれ、自然であれ、技術であれ、ものの見方が大きく変わることと思います。それが本当に出来た時、学問をすることの「わくわく感」が急に身近なものとなってくるはずです。

はまだじゅんいち
前 東京大学総長
東京大学教授(憲法学)
現 放送倫理・番組向上機構 理事長



沼野充義

学問の入り口に立つ

コロナ禍の中で新学期を迎えた皆さん。学生生活への期待に胸を膨らませていた矢先、こんな事態になって、きつとがっかりしていることだろう。

私たちは疫病のことをすっかり忘れていた。大惨事はいつでも人間を不意打ちする。しかし、これは一世紀に一度あるかないかの稀有の機会でもある。二千数百年前、トゥキユディスはアテナイの疫病の流行を冷静に観察して記録に残した。そう、記録は改竄することも、破棄することもできないものなのだ。君たちもまた、古代ギリシャの歴史家にならって、鋭敏な若い感性を全開にしていま世界で起っていることを見つめてほしい。危機の中でこそ人間性があぶりだされるのだから——誰が誠実で、誰が卑劣なのか。そして「新しい生活」に向けて、想像力を発揮してほしい。未来は政治権力者の都合で決められるものじゃない。君たち自身のものだ。

「観察」と「想像」。この二つは学問の基本である。危機の現実から逃げずに向き合い、緻密に観察して、よりよい未来を想像する——殆ど(ミッション・インポッシブル)(遂行不可能任務)のようだが、これこそは真実を求めて未踏の沃野を探求する学問の本質だ。その冒険旅行のりりしいヒロイン、ヒーローは、むしろ、君たち自身。誰も君たちかわりに人生を生きてはくれない。新生活のスタートにあたって、いま目の前に千載一遇のチャンスが開けている。君たちはいま、わくわくするような学問の入り口に立っているのだ。

ぬまの みつよし
前 東京大学教授(現代文芸論)
現 名古屋外国語大学副学長



竹中英俊

人と人との出会い
人と本との出会い

大学へようこそ。今年は特別な年、皆さんは、オンライン授業を受けていることでしょう。

大学出版部において半世紀近く読者に向けて本を編集してきた者として、皆さんに向けて本(と電子書籍)について語ろう。わたしが考えてきた読者の第一は、大学生です。大学生としてぜひ身につけてもらいたい「生きる=教養」、「学ぶ=知識」、「考える=思想」を伝えるたくさんの本(と電子書籍)を送り出してきました。その思いは、新型コロナウィルス禍によっても変わることはありません。むしろ、その思いをより強めています。

ネットでも書店でも大学生協でも本(と電子書籍)を手に入れるし、ポスト・コロナ禍には大学や地域の図書館でも本(と電子書籍)を手に入れることができるでしょう。どんな本(と電子書籍)を選ぶかが重要です。それは、大学で出逢う先生方や友人たちとの交流を通して見出ししてほしいと思います。そして、ぜひ、生きる・学ぶ・考えるワクワク感(グルーヴ感)を本(と電子書籍)を通して味わってほしい。大学は人と人との出会いの場であり、また人と本(と電子書籍)との出会いの場でもあるからです。

たけなか ひでとし
前 東京大学出版部 常務理事
現 北海道大学出版部相談役



大隅典子

繭の中で考える
ACADEMIC GROOVE

仙台は5月が一年でもっとも美しい季節。でも、緑あふれる東北大学のキャンパスに、今年は学生さんの姿が無い。新入生にとって、COVID-19対応のこの状況はとくに辛いだろうが、私たち大学の教職員にとっても、学生のいないキャンパスはとてつもない寂しい。

私たちは今、フィジカルディスタンスを保つ「新たな生活様式」に対応しようとしている。「ニューノーマル」と呼ばれるスタイルに、戸惑いを感じている人も多いだろう。

だが、物理的に隔離されている私たちは、むしろ今、オンラインで繋がっている。地理的距離の無い世界で、あるいは心理的バリアを低くしながら、コミュニケーションがより進んでいる。日々の忙しさで後回しにしていた新たなチャレンジをしやすくなっている。これまで接点がなかった人との出会いが、ヴァーチャルに生まれている。

実験が制限され新たなデータを得ることができなくても、公開データを利用することにより、誰もが“ドライ”な分野で研究者になれる。自分の閃きをデジタルに解析できるのだ。

蝶は蛹の中で変身する。自肅が求められる今の時期を、大事に繭の中で過ごそう。羽化した後のACADEMIC GROOVEを考えながら。

おおすみ のりこ
東北大学副学長
東北大学教授(発生発達神経科学)



出口治明

自らの興味の在処を探せ

コロナ禍は自然現象であって人間にはコントロールできない。しかもワクチンや薬が開発されていない現状では、先ず、ステイホームを行うしかない。その場合、ステイホームを可能ならしめるエッセンシャルワーカーへの感謝と支援を行う必要がある。また、ステイホームは巨視的には収入減を意味するので、弱者に対する所得の再分配政策をスピーディに設計、実施しなければならない。コロナ対人類の戦いの中で、この3つを各国(指導者や社会)が競っているのだ。APUでは、かかる状況の中で、上半期の授業は全てオンラインで行うと決めた。既にオンライン授業が始まっているが問題なくスムーズに授業が行われている。ニューノーマル(コロナ後)の世界では、授業はハイブリッド型(オンラインと対面の組合せ)に進化していきだろう。人間は、人・本・旅でしか学べない動物だ。たくさんの人に会い、本を読み、興味の惹かれた場所に出向いて体験する(旅)ことを通じてしか人間は賢くならない。ステイホームの間は人や旅は難しいので、普段は取り組みなかつた歯ごたえのある分厚い本にぜひとも挑戦してほしい。「好きこそもの上手なれ」という言葉があるが、人間はワクワクドキドキするもの、好きなものや興味のある対象しか真に学ぶことはできない。好奇心と執着心が全てだと喝破したノーベル賞学者もいた。ステイホームで時間がある時こそ、自分と向き合い自分は何に興味があるのかを見つけ出して欲しいと願うものである。

でぐち はるあき
立命館アジア太平洋大学(APU)学長



ACADEMIC GROOVE CONTENTS

書籍『東京大学アカデミックグルーブ』の各企画を
ちょっとだけ紹介します。

学術のグルーブ(わくわく感)を社会に伝える「ACADEMIC GROOVE運動」は、
様々な編集手法を駆使して学術の魅力を伝える活動です。

ここでは、2008年に刊行された書籍『東京大学アカデミックグルーブ』に掲載された
様々な編集企画の中から、3つの企画を再録します。

学術というものは本来、けっして堅苦しいものではありません。

その表現フォーマットが少し変われば、新たな魅力がたくさん伝わってくるのです。

CONTENTS_1

アカデミック・ツアー

様々な学問分野を「国」に見立てて諸国を旅するアカデミック・ツアーのガイドブックです。
全部で8つの国(分野)を紹介していますが、各国(各分野)の研究者によるガイドブック本文は名文揃いで、
国ごと(分野ごと)のTOURING DATAとMAPも掲載されています。
ここでは、福島智 東大先端研准教授(現 教授)による「障害学」の紹介部分を転載再録します。
また、4つの国(分野)のTOURING DATAも紹介いたします。

DATA & MAPの読みかた・見かた

TOURING DATA

- [建国年代]……紹介学問分野が成立した年代。または一般的に認知された年代。
- [公用語]……紹介学問分野を学ぶために必要な基礎的学問分野。
- [入国ルート]……紹介学問分野に達するための経路。または、入門するために経由する周辺学問分野。
- [名所]……紹介学問分野のおもしろいところ。醍醐味。
- [ご当地自慢]……紹介学問分野が社会に貢献できること。

MAP

中央に紹介学問分野、そのまわりに周辺学問分野を配した簡単なMAPです。各周辺学問分野はそれぞれ、紹介学問分野に接した部分(国境)があります。しかしながら、周辺学問分野同士の接点・関係は考慮していません(隣同士の周辺学問分野は必ずしも接点があるとは限りません。また、離れた周辺学問分野同士は接点がないとは限りません)。紹介学問分野のみに焦点を当てて作ったMAPですので、「紹介学問分野を取り巻く環境」とお考えください。

渋滞学

Jamology

TOURING DATA

- [建国年代] 1996年
- [公用語] 数学、理論物理学
- [入国ルート] 交通工学、建築工学、情報工学、生物学、経営学、経済学など
- [名所] ●「相転移」峠…渋滞発生の瞬間が見られる場所●「創発」湖…渋滞という現象は、まさに個人(部分)と社会(全体)の関係を考えることと関連しているが、これを感じられる場所。●「ASAP」公園…エイセップという数学的に優れた渋滞の理論モデルで遊べる
- [ご当地自慢] 渋滞に巻き込まれた人のイライラ解消、物流や通信の効率化、災害時の安全な避難、CO2低減による環境問題への貢献

西洋古典学

Greek and Latin Classics

TOURING DATA

- [建国年代] 紀元前5世紀あるいはそれ以前。ルネサンスを古典学の再建と考えれば14世紀
- [公用語] 古典ギリシャ語ならびにラテン語。英独仏伊など西洋諸言語。あとは、あらゆる雑識
- [入国ルート] すべての道はローマに通ず
- [名所] なんとはなしに名のみ知っていた書物を原文で読むこと
- [ご当地自慢] 世界が現代の私たちのためにあるのではなく、私たちの考え方も行動様式も価値観も、おしなべて歴史と不可分であること、のみならずそれらを統括して知ることには、人類誰もが参画できることを実感すること

量子テレポーテーション研究

Experimental Study on Quantum Teleportation

TOURING DATA

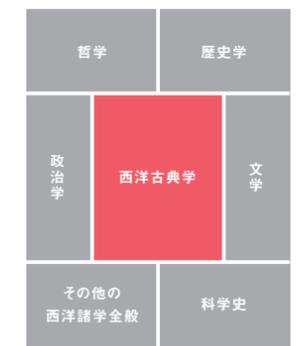
- [建国年代] 1980年代
- [公用語] 量子情報科学
- [入国ルート] 一般的な物理学
- [名所] ●「EPRのパラドックス」●「シュレディンガーの猫」。これら20世紀の思考実験が21世紀のテクノロジーを用いて実験できる
- [ご当地自慢] 高性能コンピューター、情報通信

国際森林環境学

Global Forest Environmental Studies

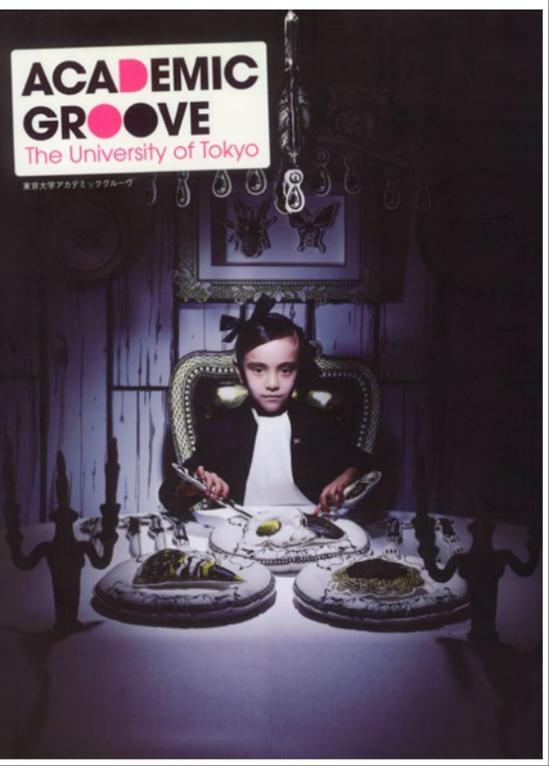
TOURING DATA

- [建国年代] 2004年夏
- [公用語] フィールドワーク、森林社会学、森林政策学、森林計画学、リモートセンシング・GIS
- [入国ルート] 森林科学、開発学、環境社会学、地域社会学、生態人類学など
- [名所] 新興国のため、歴史を有する名所はない。しかも、国境が明確ではなく隣国へ友好的な侵攻を繰り返している。つまり、国のあり方自体がまるごと名所である
- [ご当地自慢] 虫の目(村落)から、鳥の目(地方自治体、国家)、人工衛星の目(世界)まで、様々なレベルを対象とした実態把握に基づく改善策の提案(政策提言など)ができること



CONTENTS

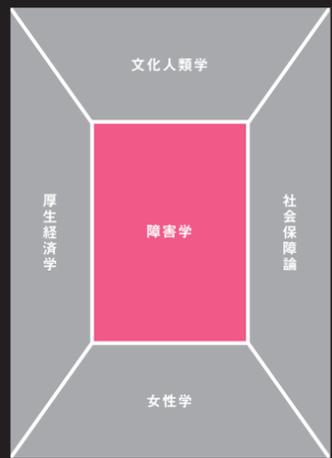
東京大学アカデミックグルーブ
ACADEMIC GROOVE The University of Tokyo
2008年/東京大学制作、東京大学出版会販売
1,200円



- あなたにとってAcademic Grooveとは?
- Academic Map 「知」を地図化せよ(松島克守、美馬秀樹)
- 特別インタビュー 「私が経済学にGrooveを感じた瞬間」(柳川範之)
- Academic Tour ようこそ! 学問の国へ!(西成活裕、福島智、松島智、逸身喜一郎、古澤明、廣訪元、長野哲雄、井上真)
- 学会ってなんだろう?(小野里拓)
- 知られざる「学術誌の世界」
- Visual Academic Essay 1 ダンツィオ「文学」というスタイル、あるいは「人生」というパフォーマンス(村松真理子)
- 対話—Dialogue 1 趣味と学問(柴田元幸×塚谷裕一)
- Academic Translation 難しい学問、翻訳します!(清水修、新井仁之、榎原哲也)
- 重複定義用語辞典(的な企画)「同語異義」
- シンポジウムに行こう。(徳久宗平)
- Visual Academic Essay 2 相撲はSUMOに変わりゆくのか?—スポーツをルール化するということ(新田一郎)
- Academic Attitude すべての学問は仮説である……か?(佐藤勝彦、末木文美士)
- Visual Academic Essay 3 僕が闘牛を買った理由—経験のフィールドワーク(菅豊)
- 知の断面図(島園進、赤石美奈、田近英一、辻宏道、田中久美子、酒井邦彦)
- Visual Academic Essay 4 「モノとしてのメディア」に規定される現実—マクルーハンのテーゼを継承するメディア論(北田暁大)
- 対話—Dialogue 2 余はいかにして研究者になりしか(高橋慎一朗×影浦映)
- Academic Groove 制作話(沼野充義、清水修)
- 受け継がれる「知」への思い「先人への手紙」(岡村定矩、高橋宏志、浅島誠、西尾茂文、小宮山宏、平尾公彦、山田興一、辰野裕一、濱田純一)

TOURING DATA

[建国年代] 1980年代初頭
[公用語] 社会学、哲学、歴史学など用いられる言語多数
[入国ルート] 社会学、教育学、心理学、哲学、社会福祉学、女性学、医学、福祉工学などの他、経済学、文学、歴史学など、各種入国ルート、または航空路あり
[名所] ●能力産出油田 ●文化多様性ジャングル ●障害物エンジョイトレッキング山地
[ご当地自慢] 「障害」について考えることは、文化や能力の多様性、人と社会のありかたを考え直す機会を提供してくれる



[6ピットの触覚刺激で森羅万象を伝える]

1981年、筆者の母・福島令子が考案した新しいコミュニケーション法。盲ろう者の両手の人差し指から薬指までの計6本を点字タイプ6つのキーにみだてて、話し手が指先でタッチすることでこぼを伝える。

人と社会の関係に新たな光を照射する

福島 智

電車やバスに乗ると、周囲の視線が集まる。私が同行の「通訳者」と両手を重ねてなにか指をもぞもぞさせているからだ。これは「指点字」という方法で会話をしているのだけれど、周囲の人にはわからない。

指点字は点字の組み合わせの原理を応用して、指先で相手の指先にタッチすることでこぼを伝える方法だ。目が見えず、耳も聞こえない私のような「盲ろう者」のためのコミュニケーション手段の一つである。私の場合はもっぱらこの方法で話しかけてもらい、私からは音声で答えることで、他者と会話する。そんなことをしているの、不思議そうな、驚いたような、あるいは気味悪そうな、さまざまなニュアンスの視線が集まる、らしい。「らしい」と書いたのは、これは通訳者による情報提供によるからだ。

通訳者というのは、たとえばあのヘレン・ケラー（彼女は盲ろう者である）にとつてのアニ・サリヴァンのような役割を、一定の時間行う人たちのことだ。通訳者によるサポートは盲ろう者にとって、いわばスキューバダイビングにおける酸素ボンベのような「命綱」だ。

それにしても、やはり「普通」ではない。〈不思議オーラ〉全開なのだろう。ある時中学生くらいの少年達が私の指点字を見て、「あれ、なんだろう?」「ミスター・マリックのハンドパワーだぜ、きつと」などとひそひそ話をしていたようだ。

さて、障害学である。「障害学」(Disability Studies)とはなにか? それは、障害を分析の切り口とする思想的営為であり、知の運動である。もう少し具体的に言えば、障害や障害者を把握する際、たとえば、治療や訓練による快復を至上命題とする従来型の医療やリハビリテーション学などの視点とは異なる、

新たな視点で障害に光を当てる学問である。

と、こう書いても、やはりピンと来ない人は多いだろう。そもそも「障害」とはなにか、がはっきりしない。病気や怪我などで心身の機能になにかの影響を受けて、それが治癒せず、その状態や症状が固定したものの一部を障害と呼ぶのだが、どんな「症状」でも、治癒しなければ障害と呼ばれるわけではない。たとえば、円形脱毛症がなかなか治らずそのまま「症状が固定した」人がいても、その人を障害者とは(少なくとも今の日本では)呼ばない。ではなにが「障害」であり、だれが「障害者」なのか? 実はこうした問いを持つことは、すでに「障害学」の思索を始めていることになる。

「障害」は人工的な概念である。それは、ある時代のある社会が、ある目的を持って便宜上規定する概念である。つまり、障害はなにか固定的な実体を伴うものではなく、その本質は、社会によって「作られ」、「再生産される」状態や状況、関係性そのものなのだ。こう考えると、そこには探求してみるべきテーマがいろいろ含まれていそうである。

たとえば、なんらかの障害を理由に大学受験を拒否される(「不合格」ではなく、受験自体ができないということ)。就職や昇進をめぐって、明らかな差別を受ける。アパートを借りようとする、大家から断られる……。こういう事例は今の日本にたくさんあり、こうした現状を考えれば、障害が社会によって「作られる」という意味が少し見えてくるだろう。障害者は、テレビのチャリティー番組やトレンドドラマなどで不自然に美化されたりする一方で、現実には差別と排除の対象になっているのである。

どうして、このような現象がおきるのだろう

か。そこには法制度を含めた社会のシステムや社会を構成する人々の意識はどのように関わっているのだろうか。こうした大きな問いが生じる。

他にもテーマはある。冒頭の私の指点字の例で言えば、私は「触覚言語」を使っているわけであり、これは「触れる文化」を生きているのだとも言える。日本の支配的文化は他人に触れるのを避ける「触れあいのない文化」だ(だから、私は通訳者が男女いずれの場合でも、しばしば周囲からおかしな誤解を受ける)。このように、「文化」の視点で障害を分析することもできる。そして、この「文化」は、「能力」というテーマにも繋がっていく。

私の知人の聴覚障害者の中には、スキューバダイビングをしながら、海中で手話を使って友人と自由に話す人がいる。「普通の人」にはまねのできない技だ。こうした例を考えると、「能力」とはそもそもなにか? という大きな問いにぶつかる。

社会は、そしてそれを構成する人々は、ある個人をどのように取り扱うのか? 「文化」とはなにか? 「能力」とはなんだろうか? こうした問いに障害学は、これまでになかった新たな光を照射する。すなわち障害学とは、障害の有無を超えて、人と社会のありかたを新たな視点で研究する学問なのである。

[盲ろう者] 視覚と聴覚の重複障害者。全国に1万数千人と推計される。まったく見えなくて聞こえない筆者のような「全盲ろう」から、ある程度見えてある程度聞こえる「弱視難聴」の人までを含めて盲ろう者とよぶ。

[ミスター・マリック] 日本のマジシャン。ハンドパワーを使う。「超魔術師」と名乗る。

[手話] 手指の動きや表情などでこぼを伝える方法。音声の日本語をそのまま表す「対应手話」だけでなく、独自の文法と構造を持つ自然言語としての「日本手話」(伝統手話)がある。

[障害学と能力論] 労働生産性を基準とした狭義の「知的能力」で、社会は人を選別する。役割分担の意味を超えて、「能力」によって人そのものの存在意義や価値まで規定しようとする。障害学はこうした問題にも光を当てる。

指点字とは?

「指点字」は、「書き言葉」として通常の6点点字の原理を、盲ろう者のための「話し言葉」に応用したコミュニケーション方法です。その仕組みは、盲ろう者の両手の人さし指から薬指まで(主に、爪の少し上あたり)を、点字タイプライターの六つのキーに見たてて、ポンポンと軽くタッチすることで言葉を伝える、というものです。点字は、六つの点で構成された表音文字体系です。日本語の場合ならかな文字、英語などの外国語ではアルファベットを含めて六つの点の組み合わせで表します。紙に書き、視覚障害者(盲ろう者も含めて)が指先で触読する通常の点字の書き方には、大まかに言って二通りあります。その一つは、1点、1点を点筆「てんびつ」と呼ばれる針で、「点字版」という道具を用いて書いていく方法で、もう一つは、タイプライターを用いて、1文字を一度に打ち出す方法です。このうち点字タイプライターの原理を応用したのが指点字です。点字タイプライターは六つなので、左右の手の人さし指から薬指までの計6本を六つのキーに見立ててタッチすれば、点字の組み合わせが伝わるようになります。ところで今、日本で用いられている点字タイプライターのキー配列には、大きく分けて2種類が

あります。一つは、パーキンス・ブレイラーに代表される点字タイプライターのキー配列で、これは国際的にも標準的なパターンです(点字を凸「とこ」面から見たイメージ)。もう一つは、ライト・ブレイラーと呼ばれる点字タイプライターに代表されるキー配列で、これは点筆を用いて手書きで点字を書く時のパターン(点字を凹「おう」面から見たイメージ)に対応しています。また、「書き手」と「読み手」が横に並んで話す場合と、対面式で話す場合とは、読み取る側のキー配列(点の配列)のパターンが異なっています。このほか、通常の点字では、読みやすさと理解を助けるために、点字を定められた規則に従って区切って表記する(分かち書き)することになっています。また、「書き手」が、指先でこの「分かち書き」はありせん。その代わりに、強弱のアクセントをつけたり、短い間「ま」をとったりしながら、表現にめりはりをつけるようにします。このように、指点字独自の特徴もありますが、1文字を構成する点の組み合わせの原理は、通常の点字とまったく同じです。数字や特殊音などの記号や英語などの外国語の表記も、通常の点字の表記を応用できますので、点字で書き表せるものは、そのまま指点字でも書き表せることとなります。

同語異義

細分化された現在の学術の各分野では分野ごとに様々な学術用語が使用されています。

この学術用語、同じ言葉でも分野によってちがう意味を表す場合があります。

そんな「分野によって意味が変わる言葉」を辞書のように集めたのが「同語異義」という企画です。

ここではその一部をご紹介します。

自由 [じゆう]

①近代において“自由”は政治的・思想的束縛をうけずにふるまえる状態という積極的な意義を与えられているが、②中世には“自由狼藉”のように用いて、秩序を乱し、常識を無視する勝手気ままな行為を指す。“自由”概念の評価は、社会的な管理・保護と個人の意志・活動とのバランスによって変化する。自由を謳歌するのか、自由を不安に感じるのかは、私達にとっても大きな問題である。(本郷恵子)

まれびと [稀人・客人]

少々古い単語だが、①もともと「お客さん」のことである。しかし②折口信夫の民俗学では日本の固有な信仰や芸術の基礎をなす概念である。このコンテキストでは「まれびと」は遠い常世(ここよ)からこの世にやってくる神などで、人間に福をもたらしてくれるものである。(しかし、へそを曲げたらたたりもあり。)(ジョン・ポチャラリ)

ニート [neet]

①ニート(NEET, Not in Education, Employment or Training)とは、1990年代末のイギリスで作られた言葉で、学校教育の生徒・学生でもなく、就労してもおらず、職業訓練プログラムにも参加していない16~18歳の若者を指す。その中には、仕事を探している失業者、育児中の母親、疾病罹患者や障がい者、ボランティア活動に従事している者、旅行中の者などが含まれる。②日本で2004年頃からの言葉が片仮名で「ニート」と表記されて輸入された際、その定義は「15~34歳の非労働者(仕事をしていないし、また、失業者としての求職活動をしていない)のうち、主に通学も家事もしていない者」とされた。イギリスとの違いは、年齢層と、失業者(求職者)を含むか否かにある。日本での定義は、「働く意欲のない若者が急増している」という通俗的理解をもたらしたが、それは社会調査データにより否定されている。(本田由紀)

進化 [しんか]

①(生物学において)生物の遺伝的性質が変化し、それが集団に広がり、受け継がれること。一般には方向性はなく、より良いものに進むとは限らない。ヒトが霊長類の中でビタミンC合成能力を失ってしまったように、機能の劣化をもたらす例も少なくない。②(一般社会において)機能がよりすぐれたもの、高度なものになること。最近では翻訳の質など、①の定義ではとうてい適用できない例にも頻繁に使われる。一般社会での意味と、本来の生物学における意味とが完全に異なる好例である。③(創造説、インテリジェント・デザイン説、一部の「哲学」において)神ないし知的存在が設計し、実現する生物の形質の変化。ダーウィンに端を発する生物学的解釈を、異端の教えとして返けるが、知的存在が設計したにしては不具合や設計ミスが多い実際の生命を説明できない。(塚谷裕一)

エーテル [ether・aether]

①ギリシアの昔から、天空を満たし、光を伝えるものとされてきた物質。②化学用語のエーテルは、沸点が低く空に立ち上る液体ということでジエテルエーテルを指す一方、炭素—酸素—炭素結合を持つ化合物の一般名称ともなっている。(中村栄一)

有機化学 [ゆうきかがく]

①生物由来の物質を研究するのが有機化学の昔の定義。②今は炭素化合物の化学。血の通った連携が有機的連携。無機化学は血の通わない化学? それでは有機農業は? 「有機」は幅広い使い方をされている。(中村栄一)

プラズマ [plasma]

①医学の分野では、血液から赤血球などの細胞成分を取り除いた液体を指す血漿のことを英語でplasmaという。②物理学、工学の分野では、気体分子から電子が離れ、正の電荷をも

つイオンと負の電荷をもつ電子が共存して飛び回り、電気的中性になっている物質の状態を指す。1920年に放電を研究していた米国のラングミュア博士により名付けられたが、正負の荷電粒子を保持する空間を血漿に見立てたという説と、血漿(plasma)のギリシア語の語源「πλασμα」が意味する「形作る」に由来するという説がある。(一木隆範)

①(一般社会)一般的には電圧をかけたときにプラスとマイナスに電離した気体のことを指す。我々の生活の中において、プラズマディスプレイ、オーロラ、宇宙などさまざまな場面の説明で用いられている。②(生化学、マイクロ・ナノ化学)血液の55%を構成する液体部分。大部分は水であり、他にアルブミンやフィブリノーゲンなどの血漿タンパク質が含まれる。マイクロ・ナノ化学を血漿の分析に応用すると、迅速な病気の診断が可能になる。(北森武彦)

もの作り [create]

①(工学)部品や機械、ロボット、自動車、ビルなど、目に見える形で構造物を創造する意味で使われる。一般社会でも同様に用いられることが多い。対象とするスケールは主にメートル。②(化学)分子や自己組織化膜など、目に見えない原子・分子レベルで化合物の構造や特性を構築する意味で使われる。対象とするスケールは主にナノメートル。(北森武彦)

ノックアウト [knockout]

①一般にはボクシングなどで相手に殴られて倒れた状態をノックアウトというが、②ノックアウト・マウスのノックアウトは、特定の遺伝子の働きを調べるために一部の遺伝子を破壊することを指す。(笠木伸英)

グルーブ [groove]

我々の専門ではgrooveといえば、DNAの溝です。DNA構造の中ではとても重要な部分です。

(黒田玲子)

①grooveは、本来は「アナログレコードの音信号が刻まれた溝」のことでしょうが、②光学の世界では、回折格子(grating)という、光の回折現象を利用して、特定の波長をもつ光を得る(分光する)ための光学素子に刻まれた微細な平行溝(例えば1インチ当たり600本など)のことをgrooveといいます。(永田敬)

下の写真は火星の衛星「フォボス」です。左上の凹み(クレーター)から右下方向へと向かって溝が出ていますが、こうした構造を私たちの分野では「グループ(groove)」と呼んでいます。この場合のグループとは、「惑星や衛星上に見られる溝状の地形」の事を示します。(宮本英昭) 【編集部註】grooveの同語異義。【ACADEMIC GROOVE】読者として、覚えておいて損はありません。友達に自慢することができます。



カルチャー [culture]

①一般には「文化、教養」のこと。②微生物学や細胞生物学では、微生物ないし細胞の培養のことを言い、多種類の微生物をそれぞれ純粋な単独種で培養して収集したものを「カルチャーコレクション」などという。(橋本祐一)

クラスター [cluster] ※1

①(一般)クラスターは、本来、ブドウの「房」を意味する。②(物質科学)原子や分子をブドウの粒に見立てて、「原子・分子の集合体」のことを表す。孤立した原子・分子から成る気相と、液体・固体から成る凝縮相の中間に位置する「第四の相」にあるメゾスコピックな物質系として注目されている。メゾスコピック=マクロスコピックとミクロスコピックの中間の意。③(経済・産業界)クラスターは「特定の分野で相互に関連した企業・大学・研究機関からなる(地理的に近接した)ネットワークorグループ」のこと。「産業クラスター」と呼ばれるのが一般的。④(情報・計算の世界)複数のコンピュータを統合化して並列計算などの高い処理速度をも

つシステムを「クラスター(コンピュータ)」と呼ぶ。米国の代表的なコンピュータ会社であったDEC(Digital Equipment Corporation、現在はHewlett-Packardが吸収している)が、2台のミニコンを専用のバスで接続して計算能力を向上させたシステムを「クラスター」と呼んだのが始まりと言われる。(永田敬)

緩和 [かんわ]

①(物質科学)「分子の特定の自由度に蓄えられたエネルギーが、分子内の他の自由度や外界へ移動することによって失活する」ことを緩和と呼ぶ。一般に、エネルギー緩和と言われる。また、最近ではフェムト秒の時間軸をもつレーザーを用いて、位相(フェーズ)の揃った状態を生成することが可能であり、その位相が失われていく過程を「位相緩和」という。②(一般)何かを緩めることに使われる。「規制緩和」がその例。金融分野では、日本銀行が市場に大量の資金を供給する金融政策としての「量的緩和」が有名。(永田敬)

コンプレックス [complex]

①(心理学・精神分析(psycho-analysis))意識下に抑圧された強い感情を構成する心的イメージの複合体を言う。ときに病的な行動を引き起こす。②(数学とくにトポロジー)訳語は「複体」である。単体(simplex)という高次元の“三角形”を組み合わせて得られる複合的な図形を言う。厳密な定義は数学辞典などにゆずる。この複体概念は、過去には「位置解析学(analysis situs)とも呼ばれた、トポロジー(位相幾何学)の基礎概念の一つである。多様体のBetti数など不変量を定義するのに用いる。※蛇足。残念ながら病的位相空間は、複体(complex)では把握・解析できない。■関連用語① complex analysis(複素解析学):「数学」複素数(complex number)を変数とする関数(function)を微分積分で扱う解析学である。物理学全般の他、流体力学など多方面に応用がある。■関連用語② complex system(複雑系):一時は流行語にまでなった。多数の構成要素が、多くの場合非線形に相互作用をしている系(数学的・物理的・科学的・経済学的など)を言う。(織田孝幸)

モンテカルロ [Monte Carlo]

①モンテカルロは地中海沿岸のカジノで有名な街です。転じて、②「サイコロを振って」何かを数値計算することを、「モンテカルロ計算」と言います。もちろん、本当にサイコロを振るわけではなく、コンピューターで乱数を発生させます。例えば、正方形の中にちょうど取る円を描きます。乱数を発生させて、正方形の中にランダムに点を

打っていきます。円の中に入っている点の数を正方形全体に打った点の数で割ると、円の面積と正方形の面積の比率が計算できます。こうして円周率πが計算できます。(羽田野直道)

重力波 [じゅうりょくは]

①(基礎物理学)アインシュタインの一般相対性理論から予言される、時空のひずみが「さざなみ」のように伝播する現象。日本の研究グループをはじめ、検出(観測)に向けた取り組みが50年近く行われているが、未だ成功した例はない。間接的には実在が証明されているので、近い将来に直接観測されると見られている。*2 ②(地球物理学(流体力学))流体が重力の影響を受けているときに表面に発生する波。水面に石を投げ込んだときに起こるさざなみのような、ごく身近な現象。物理学における「重力波」と違い、日常的に観察することができる。そのため、例えば地球物理学者が観測した「重力波」の話を当たり前のようにしているのを聞いて、物理学者がびっくりすることがある。(高森昭光)

出生 [しゅっせい]

①(刑法)胎児が母体から一部でも露出すれば、出生したと考えられています。出生した前と後で、墮胎罪になるか殺人罪になるかが分かります。②(民法)胎児が全部露出したときが出生であると考えられています。出生前に胎児が死ねば、胎児が親の遺産を相続することはありませんが、出生後に死亡すると、いったん赤ん坊が相続した後でさらに相続がされることになります。(長谷部恭男)

小説 [しょうせつ]

①小説はもともと「小さな(つまらない)説」の意。中国で古く小説といえば、身近の雑事やうわさ話などを記録した随筆風作品を指す。②ノベルを小説と称するのは近代日本からの逆輸入である。(大木康)

社員 [しゃいん]

①(一般)社員は会社の従業員を指します。②(法律学)社員は団体の構成員を指すので、株式会社の場合でいえば、従業員は社員でなく、株主が社員だということになります。(長谷部恭男)

「がん」と「癌」

ともに悪性腫瘍全般を示す言葉として用いられるが、人によっては「がん」と「癌」を区別して用いている。①「がん」は悪性腫瘍全般を示し、②「癌」は悪性腫瘍のうち、その起源が上皮細胞あるものをいう。これに対して、その起源が非上皮性細胞のものは「肉腫」という。(橋本祐一)

※1 2020年コロナ禍の現在、「クラスター」といえば、もちろん、クラスター感染のことを指す。よって、5つめの意味を書き加えなければならないであろう。

※2 その後、2015年に米国のLIGOとヨーロッパのVirgoにより重力波の直接検出に成功した。日本では2019年、KAGRAを完成した。以後、LIGOプロジェクトおよびVirgoプロジェクトと共同観測を開始する。



Floating, Moving, Pricking

限りある環境に漂い、無限の想像力に遊べ。

[特別インタビュー] 柳川 範之

私が経済学にgrooveを感じた瞬間

2008年に書籍『東京大学アカデミックグループ』が刊行された当初、大変話題を集めた

「柳川 範之の東大経済学部准教授(現 教授)インタビュー記事」を12年の時を経て、全文再録しました。

柳川先生は高校に行かずに大検(大学入学資格検定。現在は高等学校卒業程度認定試験)に合格し、慶應義塾大学の通信教育課程を卒業。東大大学院から当時、経済学部准教授になっていた異色の研究者です。

学術にグループを感じて独学で研究者になってしまった柳川先生の言葉は、
なんか、とっても説得力があるのです。

柳川 範之(やながわ のりゆき)

東京大学大学院
経済学研究科・経済学部 教授

中学卒業後、父親の海外勤務の都合でブラジルへ。ブラジルでは高校にいかず独学生活を送る。大検を受けたのち慶應義塾大学経済学部通信教育課程入学。同過程卒業後、1993年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士(東京大学)。慶應義塾大学経済学部専任講師、東京大学大学院経済学研究科・経済学部助教授、同准教授を経て、2011年より現職。内閣府経済財政諮問会議民間議員、内閣府全世代型社会保障検討会議議員、東京大学連携研究機構不動産イノベーション研究センター長、東京大学金融教育研究センター・フィンテック研究フォーラム代表。NIRA総合研究開発機構理事等。主な著書として、『東大教授が教える独学勉強法』草思社、『40歳からの会社に頼らない働き方』ちくま新書、『東大柳川ゼミで経済と人生を学ぶ』(日経ビジネス人文庫)『法と企業行動の経済分析』日本経済新聞出版本部、等がある。

16歳のある日……私はリオ・デ・ジャネイロのビーチに佇んでいました。

そこで見た、ある光景は、はっきりと脳裏に焼きついていきます。ええ、今でも時々、思い出すことがあります……灼熱の太陽、真っ青な海、どこから聞こえてくるボサノバのリズム。そして、砂浜に遊ぶ楽しそうな人々……よくあるブラジルのリゾートの風景ですが、日本の夏の砂浜とはただひとつ違う点がありました。

それは、売り子です。

粗末な服を着て、見るからに貧民街から物を売りに来たであろう売り子。

貧富の差が比較的小さい日本では、そんなふうに見える売り子はいませんよね。リオ・デ・ジャネイロでは、そういう売り子がビーチにたくさんいるんです。もちろん、砂浜で遊んでいる人々はほとんどが富裕層の人間です。この売り子とリゾート客の対比を見てしまった瞬間、何か割り切れない

ものを感じました。

胸の中がモヤモヤする感じです。

「この感じ、何なんだろう」と思いました。

しかし、その時は解りませんでした。このモヤモヤは後々まで、私の人生に影響を与えてくるんです。

ブラジルへ 私が高校に行くのをやめた理由

突然、こんなことを話すと驚かれるかもしれませんが、私は高校に行っていません。リオ・デ・ジャネイロのビーチでモヤモヤしたのを感じた時も、高校生でなく、学校に行っていない16歳の少年でした。それなのに、現在は東京大学の准教授をやっています。このことを話すと皆さん、驚かれます。いや、高校だけでなく、大学も

変わった形です。慶應義塾大学(以下、慶應大学)経済学部の通信教育課程を卒業したんです。日本人の感覚からすれば、ちょっと変わった経歴で大学の先生になりました。

冒頭からブラジルの話などしてしまいましたが、出身は埼玉県です。出身とはいつても本当に小さい頃しか埼玉に住んでいなかったの、全然記憶にはありませんね。父の転勤の都合で、埼玉、大阪、横浜と移り住み、横浜にいた時に小学校に入学しました。そして、小学4年生の夏に、やはり、父の転勤で家族とともにシンガポールに移り住みました。シンガポールには中学1年生までいたので、3年間、住んでいたことになります。その後、日本に帰ってきて、中学時代は東京で過ごしました。特に帰国子女的な部分もなく、普通の日本の少年だったと思いますよ。

中学を卒業する頃、父の次の転勤先

がブラジルに決まりました。私は一応、高校受験をしたんですが、ブラジルに行きませんでしたので、日本の高校には行きませんでした。結局、家族とともにブラジルに移り住んだのが16歳の春でした。

最初はブラジルで高校に行こうと思っていたんです。ブラジルではポルトガル語が出来ないと話にならないのですが、もちろん、私はポルトガル語なんて全然解りません。そこで、向こうの高校に問い合わせたところ、「まず、小学校に入って、ポルトガル語を覚えながら上に上がってきなさい」という答えが返ってきました。

で、それはイヤだな、と(笑)。だから、高校に行くのはやめて、日本の教科書や参考書を持って自分で勉強することにしたんですよ。

え? ……そうですね。高校に行くのをやめるって普通は大決心かも知れませんね。でも、私はなぜか、すんなりとそう思ったんですね。「高校、行かなくていいかな」って(笑)。ブラジルに住むことでラテン気質の影響を少し受けた気がしますが、ブラジルに行く前から楽天的な性格だったのかもしれない。たしかに、高校に行かないと決めるのは普通の日本人の感覚からすると大胆ですね。まあ、親は心配していたかもしれませんが(笑)。

かくして、家族とともに渡ったブラジルの地で、自学自習を、というか、独学を始めたわけですが、いつも勉強していたわけじゃありません。テニスやサッカーをやったり、映画を見に行ったりして、かなり、遊んでいましたね(笑)。「サッカーをやった」とは言っても、ご存知の通り、ブラジルはサッカーの国ですから、同世代の子達は相手にしてくれません。とにかく、みんな、うますぎるんですよ。もう全然、レベルが違う。だから相手をしてくれるのは小学生ぐらいなんです、その小学生がまた、うまい(笑)。一度、ブラジルの小学生とサッカーをやってみれば、「こんなに違うものか」と思うはずですよ。だから、小学生となら良い勝負ができるということではなく、小学生のほうが断然うまいけれど、一

応、一緒に遊んでもらえるということですね(笑)。彼らはサンバのステップでボールを蹴ります。もう、日本人とは全然、リズム感が違うんです。ブラジルの人々はラテン気質ですから、とても陽気で楽天的なんですね。私は普通の日本の少年だったので、ブラジルに移り住んだ当初はちょっと、それに違和感を覚えていました。「とても、あんなに楽天的にはなれないな」という感じ。だけど、不思議なもので、住んでいると、だんだん、その土地の人々の影響を受け始めるんですよ。後に、日本に帰国してから、自分の考え方や生活様式がちょっとブラジル化していることに気づきました。「自分はブラジル人みたいになれない」と思っていたのにね(笑)。

解りやすい例で言うと……ブラジルでは、目の前を女性が通り過ぎる時にしっかりと目で追うのが礼儀なんですよ。これは「貴女は素敵だ」という意思表示であって、女性に対する賛美の表現なんですね。だから、男性が道に並んで歩いている時に向こうから女性が来ると、順番に顔が傾いていくんです(笑)。全員がずっと目で女性を追っているわけ。だけど、そんなこと日本でやったら、嫌がられますよね。変な人だと思われるでしょう。だから、後に日本に帰ってきた時に、「女性を目で追うのをやめなきゃ」と自分に言い聞かせていた記憶があります(笑)。

独学の日々。 そして、2つのブラジル体験

まあ、そんなブラジルに徐々に慣れながら、自宅で独学していたわけです。当時、家で勉強していたのは、日本の高校レベルの内容がほとんどでしたが、少しだけ公認会計士の勉強も始めていました。会計学の基本的なところを少しやっていたという感じですね。なぜ、会計士の勉強を始めたかということ……これは父の「刷り込み」が大きかったと思います(笑)。私の

父は金融系のサラリーマンで、先ほどからお話しているように転勤族でした。今にして思えば、組織で働く辛さを強く感じていて、会計士のような自立した専門職に憧れがあったんでしょうね。父は度々、「会計士はいいぞ。お前、会計士になったらどうだ? 会計士の資格をとって国際的な金融コンサルタントになれば、自由に世界を飛び回りながら自立した仕事ができるんだ」ということを私に言っていました。それを聞かされるたびに「そんなもんかな」と思うようになって、会計士の勉強を始めたんだと思います。だから、まさに「刷り込み」ですね。大体、中学を出たばかりの子が本気で「会計士がいい」なんて思うわけはありませんからね(笑)。それでも、そういう勉強を始めたのは「自分で道を切り開いていかなければ」という気持ちが強かったからだと思います。「高校に行っていないのだから、大学に行くためには大検(編集部注: 大学入学資格検定試験。現在は高等学校卒業程度認定試験)をクリアしなきゃならない。誰にも教わらずに独学で何とかしてはならない」という思いが心のどこかにあったんだと思います。

高校生ぐらいの年代といえ、遊びたい盛りですよ。周囲には楽しげなものがあふれている。実際、私もテニスやサッカーや映画などを楽しんでたわけですが、それでも、勉強を続けられたのは、理由があると思うんです。それは「好きな分野の勉強をたくさんできたこと」。もし、普通に高校に行っていたら、好きな分野の勉強ばかりしているわけにはいかないですよ。だけど、独学なら自分で勝手にカリキュラムを決められます。好きな分野の勉強をたくさんやるのなら、あまり、苦にならずに興味を持ってやれると思うんです。もちろん、中学時代まで「勉強そのものが嫌いではなかった」という点もあると思いますが、好きな分野を重点的にやっていたので独学を続けられたんだと自分では思っています。

ブラジルには3年間いましたが、ポルトガル語は片言程度しか話せるようになり

なぜか、すんなりとそう思ったんですね。
「高校、行かなくていいかな」って。

ませんでしたね。買い物ができるとか、その程度です。今になってみれば、もう少ししっかりとポルトガル語をやっておけば良かったなと思います。近頃はブラジルのサッカー選手がたくさん日本に来ていますから、通訳のアルバイトが出来たんじゃないかな、と(笑)。

それから……ブラジルに住んでいた3年間の経験の中で、とても印象に残っていることが2つあります。

ひとつは、冒頭でお話したりオのビーチの光景。もうひとつは、ブラジル在住の日系人の方々とお話ししたことですね。ご存知のように、ブラジルには日系人、つまり日系移民の方がとてもたくさんいらっしゃいます。日系3世・4世となると、もうほとんど完全にブラジル人なのですが、1世や2世はまだ日本人の部分強く持っています。アイデンティティという意味でもそうだし、生活習慣などでもそうです。そういう日系1世・2世の方々と話す機会があったんですね。1世の方々は、ブラジルという新天地にやってきて、それこそ、ゼロから今の生活を築き上げてきたわけで、とても苦労してこられた方が多いんです。2世もそう。子供の頃に親に連れられてブラジルに来て、経済的な問題ばかりでなく、様々な苦労をして育ってきた方ばかりなんです。そういう方々を接した時に、何となく居心地が悪くて、申し訳ないような気持ちになりました。「同じ日本人なのに、僕は日本で、のほほんと育てきちゃって、すみません」という感じですね。

ともあれ、この2つの記憶は、後々まで、私の心の隅にしっかりと、とどまっています。

大学合格。 そして慶應大学通信教育課程へ

ブラジルから日本に帰国したのは19歳の頃でした。父の次の転勤先がシンガポールに決まったのですが、シンガポールに行くまでの間、一時帰国したんです。その時に、大検を受けました。日本では、現役なら18歳で大学に入学しますよね。私は19歳で帰国して、大検を受けて合格して、20歳の4月に大学に入学していますから、ストレートで大学に行った人より2年

遅れたわけです。もう少し早い時期に大検を受けられれば良かったのかもしれませんが、結局、家族で一時帰国するタイミングに合わせました。

それで、大検に一応、通りまして、慶應大学経済学部の通信教育課程に入るわけです。通信教育課程に入学したのは、シンガポールに住みたかったからです。日本で普通に大学に入って一人暮らしをしても良かったんですが、家族とともにシンガポールに行きたかったんです。大検というのは、合格しても大学に行く資格を得られるというだけなので、日本の制度上は中卒(中学卒業)らしいんですね。だから、大学を卒業して大卒になるまで、ずいぶん長い間、中卒の期間がありました。そのあたりも日本人の感覚からすると、普通ではないですね。経済学部を選んだのは、やはり、会計士になろうと思っていたから。経済学部に行けば、会計士の勉強と兼ねられると思ったんです。「ゆくゆくは、日本の会計士の資格を取って、米国の会計士の資格も取って、国際ビジネスのコンサルティングをやればいいな」と思っていました。ですから、日本の大学に行くことは、あまり強く意識していなくて、「早く資格を取りたい」という気持ちのほうが強かったですね。慶應の通信教育課程に入学した後は、もちろん、シンガポールに教科書や参考書をごっそり持って行きました。ブラジルの時と一緒に、やはり、大学時代もかなりの部分が独学のようなものでした。1年のうち、1ヶ月ぐらいスクーリングがあったので、その間だけ、一人で帰国して大学に通っていました。

会計士の試験科目に経済学があったので、シンガポールには経済学の参考書も持っていきました。会計士になるためのお勧め参考書がよく雑誌などで紹介されていたので、それに従って持っていたわけです。でも、そういう参考書を読んでもさっぱり解らなくて全然、面白くなかったんですよ。いや、面白くないどころか、まったく解らないので「こんな調子で試験に通るかな」って困っちゃって(笑)。それで、別の参考書を買ってみたり、シンガポールの本屋さんに行って英語の本を買ったりして、いろいろな経済学の本を読んでみました。すると、今から思えばスタンダードなテキストなんです、ある英語の本を読んで、内容がすごく良く解ったんです。ドーンブ

シュ&フィッシャー著の『マクロ経済学』という本です。それまで、何冊かの本を読んでも、今ひとつ解らなかつたことが、とてもクリアに書いてありました。世の中は複雑なので、経済現象もいろいろな要素が絡み合っていて起こっていきまよね。ドーンブシュ&フィッシャーの『マクロ経済学』には、そういう複雑な経済現象をシンプルなロジックと簡単な数学モデルでとても綺麗に解説してあったんですね。読み終わった後は、胸のつかえがスッと取れたような気がして、「経済学って面白い学問だな」と思いました。そういう「見通しの良さ」がすごく魅力的に思えたんです。数学モデルで社会現象を切っていく、ある種の「美しさ」だと思いました。

思えば、私が初めて経済学にgrooveを感じたのは、この時でした。

今、「数学モデルで社会現象を切っていく」と言いましたが、私がイメージしていた「社会現象」は、ブラジルとシンガポールの社会に起こっていたことでした。当時、この2つの国は社会状況がまるで違っていて、両極端の国だったんです。ブラジルは累積債務がすごくて、IMF(国際通貨基金)がかなり強硬に「自分たちの主張する経済政策をやれ」と迫っている国でした。国全体が経済的に苦しくて、私が住んでいた頃は毎週のように物価が上がっていくような超インフレ期だったんですね。一方、シンガポールはとても小さい国で政府が強い力を持っているんです。ちょっと社会主義に近いところがあって、ある意味では窮屈なんです、経済的にとてもまくいってました。ブラジルとシンガポールを比べて「どうしてこんなに国によって違うんだろう」と思っていたところへ『マクロ経済学』がスパッと切って綺麗に解説してくれたわけです。

その後、経済学が面白くなって、何冊か、同様の解説書を読みました。そうしていくうちに、だんだん、会計士の勉強は隅に追いやられていって、「経済学をもっと突っ込んでやってみよう」と思うようになったんです。

経済学をやってみようと思った理由としては、さきほどの「社会現象を数学モデルで切れる美しさ」に加えて、もうひとつ、ブラジルでの記憶がありました。リオのビーチでの光景と日系1世・2世の話。いわゆる「貧富の差」のようなものを

人間は実体験で見たり聞いたりしたことによって、 何かの感覚や感情が湧いてきて、 そこから突き動かされていくものがあると思うんです。

目の当たりにして、「現実」として自分に迫ってくるものがあって、それを解明したくて、あるいは、少しでも良い方向に持っていける気がして、経済学に目を向けるようになったということですね……なんて、いろいろと説明していますが、今だからこそ、貧富の差、政策の違いなど言葉にできるのであって、ブラジルにいた頃の私は、リオのビーチで何かモヤモヤしたものを感じたり、日系人の方と話して何かが居心地の悪さを感じたりしてただけでしたよ。あの頃は、今よりも、もう少し感覚的だったし、感情的だったと思います。

でも、そういう感覚的なものを感じることは、実は、とても大切なことだと私は思っています。人間は実体験で見たり聞いたりしたことによって、何かの感覚や感情が湧いてきて、そこから突き動かされていく先が私の場合経済学だったということですね。

経済学への尽きせぬ思い

経済学に目覚めてしまった私は、一旦、会計士になる勉強を棚上げして、経済学の専門書や論文を読み始めました。まだ、インターネットでダウンロードする方法はなかった頃ですから、スクーリングの時に慶應大学の図書館に行って、学術誌から英文の論文を大量にコピーして、それを抱えて飛行機でシンガポールへ帰るといったことをしていましたね。本や論文を読み続けていくうちに、だんだん、「本当に経済学者になればいいな」と思うようになりました。

慶應大学の通信教育課程は、ちゃんと卒業論文を書かせるんです。ですから、卒業論文を書くために指導教官がつきます。私の卒業論文の指導をしてくださった先生は、国際経済学の大山道広先生でした。思え

ば、中学卒業以後、ほとんど独学をしていたようなものですから、初めて先生についてという感じですね。経済学を勉強していても「果たして自分はどの程度、経済学が解っているんだろう」という不安がありました。「研究者になりたい」と思い始めた後も、本当に研究者になれるのかどうか、まったく解りませんでした。そういう意味では、大山先生にいろいろと指導していただいて、ちょっと安心もしたし、手応えが出てきた感じもありました。しかし、指導していただくとは言っても、毎週いろいろと教わるわけではなくてスクーリングの時にお会いして教えるを乞うだけです。基本的に独学という形はあまり変わりませんでした。大山先生は、通信教育の学生が「研究者になりたい」と言ってきたことに、非常な驚きを感じておられたようです。たしかに、通信教育から研究者を目指す人は、あまり多くはないでしょうからね。卒論を書いている時期は経済学の面白さを日々体感していた記憶があります。その際、大山先生にとってもお世話になったので今でも感謝していますよ。書き上げた卒業論文は、アカデミックな意味で認めていただきまして、幸運にも学術誌に掲載されたんです。とても嬉しかったですね。

それから、もうひとつ、大学時代のエピソードがあります。卒論に取り組み始めた頃、いろいろな経済書を読んだんですが、伊藤元重先生(東京大学大学院経済学研究科・経済学部 教授)のご著書も拝読して、一度、お会いして教えるを乞いたいと思うようになりました。東大の経済学部に通っている友人にそのことを話すと、「一度、僕らと一緒に授業に出てみればいいじゃないか」と言ってくれました。彼は伊藤先生の講義を取っていたんですね。そこで、スクーリングの時期を利用して、東大生の友人とともに伊藤先生の講義に出席してみたいです。いわゆるモグリなんです(笑)。まあ、一度だけです。世間にも許してもらえよう(笑)。で、そ

の一度のチャンスに私はどうしても伊藤先生に聞きたいことがありました。ですから、講義の後に、質問をしに行っただけです(笑)。え? そうですね。そのあたりはブラジル帰りのラテン気質による行動だったのかもしれませんが。普通の日本人だったら、講義を聴けただけで満足したかもしれませんね(笑)。まあ、とにかく、質問に行きました。伊藤先生は、とても解り易いアドバイスをしてくださいました。大体のご意見をいただいたので、失礼しようとしたところ、伊藤先生から「君、面白い人だね。どこのゼミ?」と聞かれたんです。嘘をついてもすぐにバレると思ったので「実は慶應大学の通信教育の学生です」と事情を話したところ、「ほう! そうか。ますます面白い人だね。僕のゼミに出てみないか?」と喜んでくださって……。今度は私が驚きました(笑)。今、思えば、伊藤先生もすごい方だだと思いますね。まったく迷いもなく「僕のゼミに」とおっしゃいましたからね(笑)。もちろん、私は大喜びです(笑)。それから、スクーリングで帰ってくるたびに、非公式にゼミを聴講させていただきまして、ゼミの学生達も、ちゃんと私を仲間と認めてくれて、今でも東大伊藤ゼミのOB名簿に私の名前が載っています(笑)。

なりたかった研究者の道へ

そういうご縁もあって、慶應大学経済学部通信教育課程を卒業後、東京大学大学院経済学研究科に進学したんです。もちろん、伊藤元重先生の研究室に。大学院に通うことになったので、この時点で、やっと、シンガポールから完全帰国ですね。祖母が住んでいる実家があったので、そこから大学院に通うことになって。中学卒業以来、久々にちゃんと学校に通い始めました。当時の経済学研究科は、第二種博士課程というシステムでしたので、修

私の目から、日本の高校生・大学生を見ていると、 とても息苦しそうに見えます。

それは、生きていくルートを限定して考えているからじゃないかと思うんですね。

士・博士と2段階になっていなかったんです。一応、途中退学という形で修士号のみ取ってやめることはできたんですが、カリキュラム上は5年間一貫という仕組みでした。そういう仕組みだと、もう「5年間を全うして研究者になる」という人しか大学院に来ないんですね。現在なら、2年間で修士号を取って官庁やシンクタンクに行くといった選択肢がありますから、修士には社会的に広く門戸が開かれているんですが、当時は「もう、この道しかない」という感じでした。実際、大学院に入ると、先生や先輩から「君、大変なところに来ちゃったね。もうこれで社会復帰はできないね」というようなことを言われたりしていましたから。だけど、私は最初から研究者になりたかったから大学院に行ったわけで、何も悩むことはありませんでした。

大学院時代は、途中で1年間、米国のプリンストン大学に行った後に、帰国して東大で博士号を取りました。通常、大学院時代に米国に留学したら、米国の大学でPh.D. (博士号)を取ってくる人が多いんですが、私は「ビジティング・スチューデント」というプリンストン大学の制度を使って米国に行ったんです。米国では、博士号のキャンディデート(学位取得希望者)になるためには、1年目に基礎科目の単位をちゃんと取らなきゃならないんです。そのためには単位取得の試験を受けなければなりません。それが嫌だったので、ビジティング・スチューデントという形で行きました。何度も試験を受けるのは嫌でしたから(笑)。一応、入学審査はあったんですが、推薦状とエッセイを提出すれば良かったので。

プリンストン大学に留学した時にも、伊藤先生との出会いのような不思議な縁がありました。国際貿易論で著名なグロスマン先生というプリンストン大学教授がいらっやいます。彼が日銀に呼ばれて来日していた時期があったんです。グロスマン先生の研究にすごく関心があったので、

彼の研究を発展させた論文を書いて、たまたま私も日銀でバイトをしていたので会いに行ったんですよ。すると、グロスマン先生は私の論文にとても関心を持ってくださって、「君、僕の大学に来ないか」と言ってくれたんです。この時も、非常に嬉しかったですね。先ほど話した「ビジティング・スチューデント」という制度を使うと、1年間だけなら東大の大学院を休学せずに、つまり、東大のほうの年限を止めずに行けるということもあって、それでプリンストンに行ったわけです。幸いその1年の間に、グロスマン教授とだけでなく何人かの教授と一緒に論文を書くことができました。短い期間でしたが、様々な方と知り合うことができ、とても良い経験でしたね。

米国から帰国後は、通算5年間の博士課程で博士論文を書き、博士号を取って修了しました。そして、慶應大学経済学部専任講師として就職しました。通信教育時代の大山先生が推薦してくださいました。

慶應大学には3年間いました、その後、東京大学の助教授になり、現在に至っています。

独学の魅力、研究者の魅力 そして、経済学の魅力

以上が現在までの私の経歴です。ちょっと変わった経歴で大学の先生になったと冒頭で話した理由が、これでお分かりいただけたでしょうか。思えば、「経済学が面白くて仕方がない」という気持ちから「ずっと経済学を研究したい」という気持ちに至り、そのままやっているうちに、いつの間にか、研究者という職業に就いていました。研究者という職業は、自分の関心、好奇心を追い求めていけるという意味ではとても魅力的な職業だし、恵まれた職業だと思っています。いや、研究者になる以

前、ブラジル時代からずっと、私は「やりたい学問」ばかりをやってきた気がします。もちろん、大検に受かるためには好きではない科目も勉強しなければなりませんでした。それでもやはり、比較的、好きな科目ばかりを勉強していました。そういう意味では、今までの人生、幸せだったなと思いますね。やっぱり、人間って、嫌いなことはなかなかできませんが、ものすごく面白いことや好きなことは無理をしても夢中になってしまう性質を持っていると思うんです。だからこそ、ブラジルの頃も慶應大学の頃も、好きな分野の学問を独学し続けることができたのだと思います。

それから、今、つくづく思うことなんです。10代の頃から「独学」を続けていたことが研究者になってからとても役に立っているんですね。研究という仕事は、与えられた問題を解くのではなく、自分の興味のとくまに考えていって、自ら問題を、つまりテーマを見つけなければならぬ仕事です。また、テーマが見つかったら、自分自身で考えたり、調べたりしながら、独力で答えを見つけていかねばならない。それって、まさにブラジル時代の私がやっていたことにそっくりなんですよ。あの当時のことを思い出すと……たとえば、数学のテキストを読んで解らないところがあっても、それを聞く人がいないんですね。解らない証明問題が出てきても、誰も教えてくれない。だから、自分である程度、解決しないと先に進めないわけです。それで、面白ければ、もう少し専門的な数学の本を読んでみる。すると今度は「あれ？この部分、ちょっと違うんじゃないかな？」と思える記述が出てきたりして、証明をやり直してみたり仮定を変えてみたりする。そんなふうで、自分自身で考えて進んでいくことは研究者としての基本的なステップと同じなんです。研究者になりたいと思ったきっかけは「経済学が好きだ」とか「リオのビーチでの印象的な出来事」とか、いくつかあるんですが、「独学しているのと同じ気持ちのまま、自

分でいろいろやっていける職業だから、楽しいかもしれない」と思い始めたことも、かなり大きかったのかなと思います。ですから、研究者への道を進むうえで、受験勉強をほとんどせずに独学していたことは結果的に良かったと思っています。あ、こんなことを言うと、この記事を読んでいる高校生達が受験勉強してくれなくなっちゃうかもしれない(笑)。それはちょっと、まずいかもしれない(笑)。

今までの人生を振り返って、「好きなことをやり続けてきただけ」という言い方をしましたが、もちろん、私も順調に生きてきたわけではありません。事あるごとに「壁」は突き当たってきました。若い頃なら、「本当に研究者になれるかどうか解らないという不安」は自分にとって常に目の前にはだかる壁でしたし、研究者になってからも、重要な研究発表の前に数式のミスが見つかるなど、小さな壁はたくさんありました。だけど、それらをあまり大きく考えないようにしていた気がします。やはり、元々が楽天的な性格なのかもしれませんね。ブラジル気質も多少、影響しているかもしれない(笑)。そういえば、伊藤元重先生もおっしゃっていましたよ。「研究者は楽天的でなければいけない」って。これは実際に研究者になってみると、重みのある言葉なんです。たとえば、ある問題について研究を進める時に、最初からその答えがほぼ予想できるようなら一生懸命研究する意味は薄いですよ。答えが解らないから、結果が完全には予想できないから、研究者はがんばって研究するんだと思うんです。だけど、そういうやり甲斐のある研究も、「本当に答えが見つかるのだろうか」とか、「このテーマで研究していって、最終的に袋小路になってしまったらどうしよう」などと不安ばかり感じていては、研究を進めるのが怖くなってやめてしまうのではないかと思います。そういう意味で、研究者は常に楽観的でなければいけないんです。

私にとっての経済学の魅力は……やはり、先ほど話した「現実社会を数学モデルでロジカルに切ることができる快感、美しさ」に加えて、「現実社会に貢献できること」ですね。もちろん、直接的に何か貢献できているわけではないんです。お医者さんは実際に患者さんの病気を治せたりしますが、経済学のような社会科学は間接的にしか、社会に貢献できません。経済学が社会に貢献できるとすれば、基礎研究というレベルの話になるのかもしれませんが、だから、「本当に貢献したの?」と聞かれたら、「自己満足に過ぎないのかもしれないな」とも思います。だけど、とても小さなワンステップかもしれないけれど、そういう基礎研究的な側面から少しでも社会を良くしていければと思います。そして、長い目で見れば、それができるのが社会科学という分野だと思うんです。最近では日本でも「格差社会」なんて言われていますね。そんな社会を少しでも良い方向に変えていくために経済学はあると思っています。

私の目から、日本の高校生・大学生を見ていると、とても息苦しそうに見えます。それは、生きていくルートを限定して考えているからじゃないかと思うんですね。受験勉強をして良い高校に行って、また、受験勉強をして良い大学に行って、無事卒業して良い会社に就職する……そんなルートばかりを想定して生きてると、とても辛いだらうと思います。だから、「あまり標準的な生き方にこだわらなくてもいいんじゃないか」と提案したいですね。階段を踏み外す心配ばかりしたり順位を気にして苦しくなったりしている若者が多いけれど、実は、世の中には敗者復活のチャンスもたくさんあるし、私のように、標準的なルートを歩まなくても自分の好きな職業に就くこともできるんですね。現在の受験のプロセスはあまりに単線的で他の選択肢がなかなか許されないし、回り道もかな

か許されない。でも、「回り道だってあるんだ」と思うことができれば、かなり、気が楽になると思います。

それから、もうひとつ。私は、「高校を出てすぐに大学に入るというプロセス」や「大学を出てすぐに大学院に入るというプロセス」が必ずしも良いとは思わないんです。高校を出て働いた後に大学に入るとか、大学を出て働いた後に大学院に入るといったルートを歩む人がもっとたくさんいてもいいんじゃないかと思うんですね。そうすると、もう少し、歩むべき道が多様化してきて、皆、楽な気持ちで生きられると思います。私がやっている経済学などは現実社会との関連性がきわめて深い学問なので、実際に社会に出て経済活動してみないと実感できない部分があります。だから大学や大学院には、もっと社会人経験のある人が入ってくるべきですよ。特に社会人入学の枠にこだわらず、普通に学部や大学院に入ってきて、一定期間、勉強して、また、社会に出て行くという方が、もっと増えていくべきだと思います。大学や大学院というところは、「本当に学問したくなった人にカリキュラムをオファーする場所」であるべきなんです。

振り返ってみれば……。

私は、リオ・デ・ジャネイロのビーチで感じた、あの「モヤモヤした気分」をすっきりさせるために学問をやってきたような気がします。そういうモヤモヤをクリアにしてくれるものが学問だと思うんです。

今、自分が抱えているモヤモヤした気分をすっきりと整理するために大学に来て学問をやってみないか……。

このインタビューを読んでいる若者達にはそんなメッセージを贈りたいと思います。

2007年12月21日
東京大学本部棟7階会議室にて
(インタビュー構成・清水修)

[Writers] 濱田純一 放送倫理・番組向上機構(BPO)理事長/前 東京大学総長
沼野充義 名古屋外国語大学副学長/前 東京大学教授
竹中英俊 北海道大学出版会相談役/前 東京大学出版会常務理事
大隅典子 東北大学副学長 東北大学教授
出口治明 立命館アジア太平洋大学(APU) 学長

[Editors] ACADEMIC GROOVE MOVEMENT
清水修 石川淳 石川玲子
[Designer] 古田雅美(opportune design Inc.)

2020年7月発行 © 2020 ACADEMIC GROOVE MOVEMENT



ACADEMIC GROOVE 2020: Beyond the Coronavirus

© 2020 ACADEMIC GROOVE MOVEMENT